

日本を発信する英語¹

English as a Launcher of Japan

加藤知子

Tomoko Kato

I. はじめに

日本人が外国に行く機会は様々であるが、団体旅行は別として、個人旅行、短期・長期の研修／留学、また、海外勤務の際には、自分や日本について直接尋ねられることが多い。訪問先の人々にとっては、日本人からは日本について、そして日本人である訪問者自身について知りたいと思うのが当たり前であろう。しかしながら、この当たり前の事態に上手に対処できず、歯がゆい思いをした日本人は少なくないはずである。本稿では、日本人が英語圏を訪れた場合に焦点を合わせ、自分や日本について、如何なる質問が投げかけられるのか、また、それらにどのように答えればよいのかを、具体例を挙げながら示し、最後に発信型英語教育の必要性を述べ、結語とした。

II. 日本人に投げかけられる質問

(1) どのような質問が投げかけられるのか — 学習動機付けとしての情報収集 —

生まれながらに日本で生活していると、外国人が、日本や日本人について何を尋ねたいのかに思いが至らない場合が少なくない。しかしながら 21 世紀になりインターネット環境が格段に整うにつれ、日本に興味を持つ外国人たちがインターネット上で、日本について英語で発信するようになってきた。彼らが発信するそのような情報を予め集めておくと、普段日本人の間では話題にはならないことが案外、外国人にとっては興味深いものであることがわかり、実際に海外に赴く前に心構えができる。

また、日本にいながら、外国人と接する機会の多い通訳やガイド、あるいは日本語教師といった職業に就いている人々が記した、外国人から見た日本についての諸書籍を参照することもできる。更に、海外経験を持つ日本人から、現地でどのような質問を受けたのか尋ねてみたり、日本在住の外国人に直接質問して疑問を聞き出すこともできるであろう。

具体例を挙げるならば、インターネット上で気軽に見られるものとしては、トニー・マラーノという親日米国人がアップロードしている英語の動画がある²。米国人が日本のどの側面に興味を持っているのかを知るきっかけとなるし、また、日本について説明する際に必要な英語の語彙を増やすのにも役立つ。マラーノの日本人ファンたちが字幕をつけている動画もインターネット上にアップロードされている。更に、マラーノの動画を収録した『テキサス親父演説集』は、DVD付きで飛鳥新社から出版されている。

通訳ガイドを務める松本美江が、外国人観光客から尋ねられた質問とそれに対する答（共に英語訳付き）を集めた『聞かれて困る外国人の“WHY?”』も、普段日本人は気づかないけれども、

¹ 本研究ノートは 2012 年 11 月 24 日、東海市立文化センターで開催された、星城大学公開講座「日本を発信する英語」に加筆・修正したものである。

² 公式サイトの URL は <http://texas-daddy.com/> である。

外国人にとっては興味をひかれる事柄が何であるのかを知ることができる。

日本語教師らによる著作としては、海野風子らによる『日本人の知らない日本語』が挙げられるであろう。2012年12月現在、三部作として出版されている。漫画が中心であるので、気負い無く読める。ただし、英語による解説はない。

学問レベルで専門的に研究するのでなければ、これらの身近な素材を参照しながら、外国人から見た日本とはいかなるものかを知ることが、学習の動機付けとしてはふさわしいだろう。ただし、インターネット上や、普段の会話で得た情報はもちろん、紙媒体で出版されているものも含めて、その内容が正確であるか否かは、別途資料をあたりながら確認する必要がある。また、例えば政治など、話題によってはある特定の立場からのみ発せられた場合もあるので、複数の発信源をあたり、異なる立場からの情報や意見を読み比べないと、バランスを欠く危険性がある。その上で、自分の立ち位置を決め、更に、それは何故なのかを説明できるようにしておく、一段高いレベルで外国人と議論することが可能になる。この点については、後章にて再度言及する。

(2) 質問に答える

本節では、外国人から尋ねられる質問を、自分、出身地・現在居住地、日本について、の三種類に分け、以下、具体例を示したい。なお、ここでは、読者一人毎に異なる解答が予想され、かつ解答が単純である問（例えば、兄弟姉妹は何人ですか、等）には言及しないこととする。

①自分について

面立ちがアジア人である日本人は、国外では **Are you Chinese?**（あなたは中国人ですか？）と尋ねられることが多い。中華人民共和国はアジアの大国で人口も多いのに加え、世界各地には華人が居住しているので、これは当たり前である。日本人であるから、答えは **No.**（いいえ）となるのだが、それだけだと、**Are you Korean?**（あなたは朝鮮人ですか？）と尋ねられることも多いようである。日本人であれば、いずれの場合も、**No, I am from Japan.**（いいえ、日本から来ました）と答えることになる。

自分についての基本的な事柄、すなわち、職業や趣味、家族については尋ねられる機会が多いが、解答が一つに絞れないため本稿では詳細については扱わない。それでもここで一点言及しておきたいのは、宗教についてである。日本とは異なり、信仰について尋ねることは英語圏ではタブーではなく、例えばホームステイ斡旋の際に、宗教上のトラブルを避けるために予め信仰について尋ねることは英語圏人にとってはむしろ必須であるからである。

What is your religion?（あなたの宗教は何ですか？）、**Do you believe in God?**（あなたは神を信じていますか？）、**Are you a Buddhist?**（あなたは仏教徒ですか？）と尋ねられて、普段宗教を意識しない日本人は、**I am an atheist.**（私は無神論者です）と答えがちである。しかしながら、日本人の中で、神が存在しないことを積極的に信じている者は少ない。むしろ、特定の宗教に限定しないという意味で、無神論という表現を用いている者が多い。そこで、自分の宗教について尋ねられた際、明らかに特定の宗教を信仰している場合を除き、**I believe there is a God. I do not deny the existence of the spiritual world. However, I do not want to decide on a particular religion.**（私は神がいるとは信じています。私は霊的な世界の存在を否定はしません。しかしながら、私は一つの宗教に特化したくないのです）などのように答えるのが適切であろう。

②出身地・現在居住地について

自分の出身地・現在居住地に関する基礎情報は、各自治体サイトを参照すれば最新情報が得ら

れるので、事前に確認しておくのがよい。出身地・現在居住地に関わる質問も、本稿読者各人答が異なるため逐一扱わないが、英語で答える際に気をつけなければならない事柄を二点挙げておきたい。

一つ目は、**How big is your city?** (あなたの市はどれぐらいの大きさですか?) と尋ねられた場合、相手は通常、面積ではなく人口を聞いていることが多いということである。二つ目は、**Where is your city?** (あなたの市はどこにあるのですか?) という質問の答え方である。東京以外の市町村は、日本国外ではあまり知られていないので、答え方に工夫が必要である。地図を利用するのも良い。ただし、大雑把に位置関係を言うだけで納得してもらえないこともある。例えば、名古屋であれば、**Do you know Tokyo? Do you know Osaka? Nagoya is between the two.** (あなたは東京を知っていますか? あなたは大阪を知っていますか? 名古屋はそれら二つの都市の間にあります) の如くである。

③日本について

日本は経済大国であるが、どこにあるのか知らない外国人も少なくないようである。大人であっても日本の地理的位置についてあやふやな知識しかないのであれば、子供たちはなおさら、**Where is Japan?** (日本はどこにありますか?) と聞いてくる可能性が大である。実際、Beacon Learning Center というオンライン教材配信サイトには、“Where is Japan?” (「日本はどこにありますか?」) と題する教材がアップロードされており³、そこでは児童たちが、**What is Japan?** (日本とは何ですか?)、**Is Japan something real?** (日本は本当に存在するのですか?)、**Where is Japan?** (日本はどこにあるのですか?) などと質問をしながら学習を進めていく。このような質問の後教材は、**My teacher showed us a globe.** (先生は僕達に地球儀を見せてくれました)、**She said that Japan is a country.** (日本は国なんだと先生はおっしゃいました)、**Japan is on the other side of the Earth.** (日本は地球の反対側にあるのです)、**People live in Japan.** (日本には人が住んでいるのです) のように展開してゆく。日本は米国よりも永きに亘って国として存在しているのだが、情報発信力では、日本は未熟であると思わされるような教材ではある。

なお、日本の位置を示すために、日本製の世界地図を持参すると良い。説明が楽になるのはもちろんであるが、日本が中心に描かれた世界地図は、外国人には新鮮である。世界地図は、自国を中心に据えて描くのが各国の通例なので、例えば欧州では欧州を真ん中に据えた世界地図を用いている。異なる視点で描かれた世界地図を提示してみせることは、異文化コミュニケーションの第一歩ともなりえるだろう⁴。

日本については、人口や現在の首相の名前などについても尋ねられる。訪問国が選挙期間中で

³ 教材の URL は

<http://www.beaconlearningcenter.com/weblessons/WhereIsJapan/skills004.htm> である。

⁴ 自国ではなく、訪問国について尋ねられることもある。例えば豪州であれば、**Is this your first visit to Australia?** (豪州を訪れるのはこれが初めてですか?)、**Why did you come to Australia?** (なぜ豪州に来たのですか?) の如くである。**Do you like Australia?** (あなたは豪州が好きですか?) と尋ねられたら、通常、よほどのことがない限り、好きですと答えるが、その時、しばしば、**Don't you like Japan?** ((豪州が好きだというなら、) 日本は好きではないのですか?) などと、あたかもディベート力を試すかのような質問をされることもある。外交的な答の例としては、**I like Japan as much as Australia.** (豪州と同じぐらい日本が好きです) などが挙げられる。

あると、日本の選挙制度に関しても質問される。衆議院・参議院の定数や、選挙の仕組みは予め確認しておくのが良い。インターネット環境が充実している現在の英語圏では、質問を受けてから直ちにインターネット検索をすることも不可能ではないが、基本情報はある程度心得ておかないと、インターネット検索が容易になった今だからこそ、単なる事実確認やデータの提示を超えた、より高度で複雑な質問をされる場合もあるので、その際にはしどろもどろになってしまう。

例えば、**Why does Japan change Prime Ministers so often?** (なぜ日本の総理大臣はそんなに頻繁に交代するのですか?) という質問である。これは単に、日本の歴代首相名を列挙するだけの答を超えた、事実確認という次元を上回る問であるが、この少々上級な質問に対する答も現在ならインターネット上で見つけることができる。例えば *The Economist* という雑誌のサイトには、“**Japanese resignations The joke that fell flat**”なる記事が掲載されており⁵、それによれば、その理由は、**A lack of leadership.** (リーダーシップのなさ)、**Ministers are expendable.** (大臣たちは使い捨て)、**The power of the press in Japan.** (日本はメディアが強すぎる) などと説明されている。

しかし、このように答らしきものがインターネット上で即座に手に入るからこそ、更に一步踏み込んだ質問、例えば、**So, what do you think?** (それで、あなたはどう思うのですか?) と尋ねられたりする可能性が出てきている。もちろん、**I agree with *The Economist*.** (エコノミスト誌に同意します) と答えても良いのであるが、個人の意見を主張することが当たり前になっている英語圏では、それなりに自分の見解を筋道を立てて述べられるようにしておいたほうが望ましい。また、**Are these true?** (これは本当ですか?) と、情報の真偽を聞かれることもあるので、インターネット上の答 (らしきもの) に満足するだけではなく、それらが正しいか否かを、確認する癖をつけておく必要があるだろう。

日本の文化については、食べ物、折り紙、着物、宗教など、既に外国でも話題になっていたりするので、**YouTube** などでは、例えば弁当の作り方を録画し、配信しているユーザーが数多くいる。閲覧数も多い。料理や折り紙の仕方、着付けなどの説明は、言葉だけでは難しいので、実演しながら、あるいは、インターネット上で配信されている動画を見せながら解説するのがよいであろう。

それでも、予期しない質問が出されることもある。例えば、**Is yukata a kimono?** (浴衣は着物ですか?) の如くである。即答できない場合は、写真集などを参照しつつ十分に確認した上で、適切な解答を心がけたい。

訪問先で、盆踊りを披露することもある。その際、浴衣についてはもちろん、盆踊りの宗教的背景が説明できるようにしておくことよい。現代の日本人は特定の宗教にこだわりを見せず、日常生活の宗教的側面を意識することも少ない。しかしながら、たとえ自分が信仰していなくとも、異文化と接する機会が多い英語圏では、他宗教について (信仰ではなく) 知識のレベルである程度の学びをしている人々も少なくないので (例えば、キリスト教徒であってもイスラム教についての知識が豊富な人々は多い)、彼らに質問された時に備えて、日本人の側も、自分が信仰していなくても、日本の文化の土台と言える神道や仏教の基本事項は確認しておくほうがよいであろう。

神道と仏教についても、現在ではインターネット上には答らしきものが英語で掲載されている。例えば神道と仏教の違いであれば、**Yahoo! UK & Ireland ANSWERS** に、**Shintoism originated in Japan.** (神道は日本で始まりました)、**Buddhism originated in India.** (仏教はインドで始ま

⁵ 記事の URL は http://www.economist.com/blogs/banyan/2010/11/japanese_resignations である。

りました)、Shinto is a Polytheistic religion (e.g. Susanoo) (神道は多神教です(例:スサノオ))、Buddhism has no God. (仏教には創造主である神はいません)、Buddhism is based on the teachings of Buddha and Tenzing Gyatso. (仏教は仏陀とダライ・ラマ 14 世の教えに基づいています)、Shintoism is based on Japanese traditions. (神道は日本の伝統に基づいています)、などのような説明が見られる⁶。

繰り返しになるが、このように答としてある程度まとまっているものを英語圏にしながら手に入れることができている場合は、ネット閲覧者が **Are these true?** (これは本当ですか?) などと踏み込んで聞いてくることもあるので、日本人の側としても答らしいものを見つただけで満足しないで、その妥当性を検討しておく必要がある。実際、上記の解答は満点ではなく、**Buddhism is based on the teachings of Buddha and Tenzing Gyatso.**の箇所は単純化されすぎている旨指摘しなければならないだろう。模範解答例としては、**Largely they are correct. However, Buddhism is not limited to the teachings of Buddha AND Tenzing Gyatso. Tenzing Gyatso, 14th Dalai Lama, is famous, but there are other famous, influential ones, like Dogen Zenji, who founded the Soto school of Zen in Japan after coming back from China in the 13th century.** (大部分当たっています。しかしながら、仏教はブッダとテンジン・ギャツォの教えだけに限定されているわけではありません。ダライ・ラマ 14 世は有名ですが、他にも有名で影響力のある人はいます。例えば、13 世紀に中国から帰国した後、日本における曹洞宗を創始した道元禅師です) などのようになるであろう。

歴史については、『将軍』などの映画が海外で話題になり、一方で、第二次世界大戦中のプロパガンダ映像の影響からか、天皇は英語圏ではかなり知られる存在であるので、**What are the differences between Tenno and Shogun?** (天皇と将軍の違いは何ですか?) と尋ねられることもある。それに類似したものとして **What are the differences between Tenno and the Prime Minister?** (天皇と首相の違いは何ですか?) という質問も聞かれる可能性がある。日本の歴史について断片的な知識しかない外国人に英語で説明するのは容易ではないが、日本では、宗教的権威と政治的権力を、天皇と将軍 (あるいは政治家) とで分け合っているという点と、天皇は God ではなく祭司であるという点を押さえつつ、英語圏の人々であれば馴染みのある英国女王 (権威) と政治家 (権力) との関係や、聖書の中の記述 (祭司の家系であるアロンの家系は God そのものではないが特別な存在) などに言及しながら解答すると良いであろう。解答例は、**In Japan from the 12th century on, a balance was kept between Tennos and Shoguns, the former having the religious authority, the latter exercising the political power. In the modern times, it has been Prime Ministers who are responsible for politics. Tenno is a priest (not God himself) who prays for Japan and the Japanese. The priesthood has been inherited within the Imperial family, generation after generation. In this sense, Tenno is similar to Aaron the Priest, the older brother of Moses. Like the Japanese Imperial family, Aaron's family inherited the priesthood, generation after generation.** (12 世紀以降日本では、天皇と将軍の間である種のバランスが取られています。天皇は宗教的権威を保持し、後者は政治権力を行使しました。近代では、政治をつかさどるのは首相です。天皇は (自身が God ではなく) 祭司であり、日本と日本人のために祈りを捧げています。祭司職は皇室に代々受け継がれます。この意味で、天皇は、聖書に登場するアロン (モーセの兄) に似ています。日本の皇室のように、アロンの家系は、代々祭司職を受け継いでいます) のようになるだろうか。

⁶ この解答が掲載されている URL は

<http://uk.answers.yahoo.com/question/index?qid=20090524150008AASPWFg> である。

Ⅲ. 日本を発信する英語

英語圏では、政治問題について、初対面の相手にいきなり尋ねることは避けるのが通常である。従って、その問題について唐突に尋ねる方が礼儀に反しているのであるが、しばしば初対面の相手に向かって、例えば、**Japanese soldiers killed 200,000 people in Nanking.**（日本兵は南京で20万人殺しました）などと話しかけてくる人々がいる。所謂南京大虐殺は日中間の政治上の論点と化しているデリケートな話題であるにも拘わらず、である。しかしながら英語圏には中国系・韓国系の国民も生活しているし、また、留学生として中国人や韓国人も数多く学んでいるので、英語で彼らから、近代・現代日本について問われる可能性があると考えの方が現実的なのだろう。また、第二次世界大戦中日本は英語圏の国々と敵対関係であったので、英語圏には当時の出来事を今も覚えており、日本人に対しては初対面であろうとなかろうと戦時あるいは戦後の歴史的話題を持ち出すのを常とする人々がいないわけでもないだろう。

いずれにせよ、通常は初対面の相手であれば避けるはずの、この種の質問を敢えてぶつけるのには、質問者の側に何らかの意図があると考えることが可能である。そのような質問に無理に答えようとするとかえってその後の議論が泥沼化する場合もあるので、矛先をそらすことも選択肢の一つである。例えば、**This is not the right moment to talk about such matters.**（今はその件について話し合うのにふさわしいタイミングではありません）、**Why are you asking me now?**（何故私に今聞くのですか？）**That is not a proper question to ask someone you have met for the first time.**（それは初対面の人に尋ねるのに適した質問ではありません）の如く答えるわけである。

また、初対面であるとないとに拘わらず、複雑になりかねない政治や歴史、領土問題等をこちらからわざわざ持ち出す必要もないであろう。しかしながら、尋ねられた場合は自分なりに答えられるよう準備しておくことは重要である。いつも逃げるわけにはいかないし、また、逃げられるとは限らないからである。そしてこのようにデリケートでありながら国際上重要な問いに満足に答えられない日本人の数が積み重なれば、それが仮に例えば語学留学生に過ぎない立場にある者たちであったとしても、その合算が、日本の脆弱さの印となってしまう可能性もあるだろう。前出の **Japanese soldiers killed 200,000 people in Nanking.** というコメントに対しては、日本の立場を擁護しながら答える例としては、**The population of Nanking at that time was 200,000. Are you trying to say that the Japanese soldiers wiped out the whole city? If Japan had been so powerful, the whole planet earth would be Japan now.**（当時南京の人口は200,000人でした。つまりあなたは、日本兵が全人口を消し去ったとでもおっしゃりたいのですか？そんなに日本が強かったのなら、今頃世界中日本になっていたでしょう）などというものが考えられるが、この類の解答例は、所謂南京大虐殺という事件を巡り、日本の立場を護り抜く決意を示すものであるため、相手は相手で、こちら側を折伏させようと議論を繰り出してくることが予想される。従って、この後の議論を進めるためには、発言者たちには、気力と、十分な知識が備わっていることが必要となる。議論を始めたからには、戦い抜くだけの覚悟が求められるのである。

鈴木孝夫は『日本人はなぜ英語ができないか』で、超大国となった日本における発信型外国語教育の必要性を訴えている。すなわち、日本の外国語教育は「日本人としての、自分の借り物でない意見や考えを、外に向かって外国語で立派に言える人、日本に固有な事情を外国人に説明して、しかも相手を説得できる人を養成する、外向きで積極的な発信型」⁷にならなければならないと言うのである。鈴木は特に、日本の将来のためには、「国家間の利益や思惑が複雑にいくんだ国際的な駆け引きや、地球規模の資源環境問題といったような、個人の限られた知識や素朴な日

7 『日本人はなぜ英語ができないか』 p.70。

常感覚だけでは処理できない大きな問題となれば、それなりの高度の専門知識と特別の訓練を受けた、しかもスケールの大きな人材がどうしても必要⁸であるとし、そのような人材としてのエリートは「外国語、とくに英語を学んで、それに日本からのいろいろな情報を託して、外国に送り出さなくてはならない立場にある」⁹とする。このような主張は、日本と隣接する国々との間で緊張が増しつつある現在、ますますその重要性が増してきているように見える。2012年の今、鈴木が主張する力量を備えたエリートたちの活躍を切望する日本人は少なくないはずである。

しかしながら、『日本人はなぜ英語ができないか』が世に出された1999年と2012年の現在との間には、大きな違いが存在する。一つ目は、インターネット環境の格段の普及である。インターネット上では、エリートか否かに拘わらず、誰にとっても情報発信が可能であると同時に、誰もが議論の frontline に立たされることにもなる。二つ目は、日本の隣国であり、日本との関係の中でデリケートな課題が山積する中国や韓国の経済成長が著しいことである。財力をつけたこれらの国々出身の学生で、英語圏に留学する者が増えている状況の中では、公の外交の場以外であっても、例えば大衆化した日本の大学で学ぶ一学生というような立場にある日本人であっても、英語圏に語学留学した際、そこで同じく語学留学している中国人・韓国人留学生と出会い、英語で国際問題について意見を戦わせるといった場面も出てくるはずである。実際、周りに韓国人留学生が多くいる教室で、日本列島と朝鮮半島の間海の呼称は何なのか、あるいは、竹島はどの国に属するのかと、韓国人留学生から質問をぶつけられた日本人学生も、日本の某大学にはいるようである¹⁰。そのような際、最初は逃げの姿勢を取ってみても、いつかは自分の意見を提示せざるを得ない状況になるであろう。もしその学生が、そして、その他多くの同じような学生たちが、かかる国際問題に的確に答えられなかったならば、その答えられない事実が堆積され、日本の立場を弱める事態にもなり得よう。

このような現実を鑑みるに、21世紀の現在、発信型の外国語教育というのは、日本に於いては、エリートだけではなく、外国語を学ぶ学生・生徒諸君全てに必須であると言えるのではないだろうか。そしてそれも、単に事実やデータを英語に翻訳するという次元を超えて、それは本当なのか、それは何故なのか、あなたはどう思うのか、の如く、一步進んだ問が発せられた場合、筋道を立てながら自己主張ができるレベルに到達していることが要求されるのである¹¹。

日本を発信する英語を使いこなす人材を生み出す教育を実現するには、鈴木によれば、明治以降日本で主流であった受信型の英語教育とは全く異なるパラダイムが必要であると言う。そこでは、米国などで母語として日常的に用いられる、土着英語と称せられる英語ではなく、特定の地域に限定されずに用いられる、国際英語と呼ばれる英語が学習目標になること¹²、そして、日本の伝統である、自己改造・社会改革型の外国語学習態度から、中国に顕著な自己顕示・自己宣伝

⁸ 同 p. 90。

⁹ 『日本人はなぜ英語ができないか』 p. 104。

¹⁰ このように尋ねられた学生自身は、日本列島と朝鮮半島の間海の呼称は日本では日本海と言う、竹島は日本の領土である、と答えたと言う。一方質問した韓国人留学生は韓国の立場で反論し、両者共譲らないままであったが、学生たちのホストマザーが、二人の考えを足して二で割ることができればちょうどいい、とコメントすることで調停してくれたため、険悪な関係にならなくても済んだということである。

¹¹ このレベルに達することにより、経済産業省が提唱している社会人基礎力の中の、課題発見力や発信力を身に付けた学生諸君が世に出ることにもなるだろう。

¹² 使用者との関係からみた英語の3変種については『日本人はなぜ英語ができないか』pp. 54 - 55の表を参照。

型、並びに米国に見られる他者攻撃・折伏制御型の外国語学習態度へと、学習者自身がシフトすること、などが必須となるというのである¹³。パラダイム変換をせざるを得ない、という主張がまさに、日本お家芸の自己改造・社会改革型そのものであって、日本の伝統に則っていると強弁できなくもないかもしれないが、いずれにせよ、永きに亘って続いてきた日本の英語教育のあり方を大きく変える時期に差し掛かっているのではないかと、13年前『日本人はなぜ英語ができないか』で鈴木は日本の世に問うたのであるが、そのような英語教育のパラダイム変換が、日本を牽引するエリートに対してだけではなく、大衆に至るまで幅広い人々を抱合した形で必要となってきたと思わされるのが、2012年の今なのだと言えるのではないだろうか。今後、英語を教える教師たちも、その軸足の置き場を大きく変えることを求められるようになるかもしれない¹⁴。¹⁵

参考文献

淵田美津雄著・中田整一編／解説（2007）『真珠湾攻撃総隊長の回想 淵田美津雄自叙伝』講談社。

蛇蔵・海野凧子（2009）『日本人の知らない日本語』メディアファクトリー。

蛇蔵・海野凧子（2010）『日本人の知らない日本語2』メディアファクトリー。

蛇蔵・海野凧子（2012）『日本人の知らない日本語3』メディアファクトリー。

Marano, Tony（2010）*The Speeches of Texas Daddy*. [トニー・マラーノ『テキサス親父演説集』飛鳥新社、2010年]。

松本美江（2003）『聞かれて困る外国人の“WHY?”』三修社。

鈴木孝夫（1999）『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書。

インターネットサイト（最終閲覧日はいずれも2012年12月21日）

Beacon Learning Center トップページ <http://www.beaconlearningcenter.com/>

テキサス親父日本事務局 トップページ <http://texas-daddy.com/>

The Economist トップページ <http://www.economist.com/>

¹³ 外国語学習態度の類型は、『日本人はなぜ英語ができないか』p.36を参照。

¹⁴ 国際社会と自国との関係性の中での、各人の立ち位置は様々である。一方で、自国に対して誇りを持ち、かつ謙虚である者、また、自国を護る決意を持ちつつも（武力とは限らない）、他国の文化を尊重する者がいる。他方、自国について驕り高ぶる者、そして自国さえ良ければいいと思う者、あるいは反対に自国であるのに貶める者、自国はどうでも良いと思う者、そして他国に阿る者、などがいるが、どこに立つ者が国際社会で尊敬されるのかは明らかであろう。日本について発信する能力を身に付けることは、国際社会の中で日本をどのように捉えるかを適切に押さえておく限りにおいて、狭隘な愛国心に固まることなく、むしろ、望ましい国際人としての条件ともなり得るだろう。

¹⁵ 第二次世界大戦の記憶が未だ残っている現在では、近代史に関する議論の中で、自国の立場を弁護するがあまり、お互いに物別れに終わる可能性もある。断絶は必ずしも好ましいものではないので、自国の立場を弁護しつつかつ他国との関係構築の可能性を示唆するような方向に話の流れを持ってゆきたいのであれば、実際にそのような立ち位置で歩んできた人々を紹介すると良いだろう。英語圏であれば、真珠湾攻撃総隊長を務めた淵田美津雄などが挙げられよう。淵田は戦後キリスト教に回心したこともあり、米国に招待され、当時のアイゼンハワー大統領とも同じ礼拝に出席した体験を持つ。全ての日本人、全ての米国人に歓迎されたわけではない淵田であるが、それでも日米関係を修復しようとした努力、日本を愛する気持ち、そして自分の信念を貫こうとした努力等を伝えることができる。淵田美津雄については、本人が著し、中田整一が編集・解説を加えた自叙伝で、『真珠湾攻撃総隊長の回想 淵田美津雄自叙伝』が詳しい。

Yahoo! UK & Ireland トップページ

<http://wel.cs.manchester.ac.uk/studies/scweb2/user-evaluation/group-b/yahoo/>

